

〔調査報告〕 Distance

現代社会における死者と生者の距離

海野 裕（倫理研究所客員研究員）

1 はじめに 不安の時代

21世紀を希望と幸福と共に迎えたいと誰もが考えていただろう。しかし私たち人類の目の前には“新世紀”という言葉の響きとは大きく異なる景色が広がっている。20世紀に二度の大戦を経験した人類はできる限りこうした過ちを犯さないような共通の理解を取り付けていたものの、地球資源の中で最も有用な化石燃料、すなわち「石油」を巡る利権の衝突である湾岸戦争からイラク戦争への流れを止めることはできなかった。この問題は今も燻り続け、世界にテロリストアタックの不安を供給し続けている。さらにインドとパキスタン、中国とモンゴル、朝鮮半島などにおける軍事的な不安は、アメリカ合衆国の安定を機軸とした世界秩序「パックス・アメリカナ」が機能していた20世紀後半よりも増幅している。

グローバル化した経済もまた人々を不安にさせている。情報通信技術の発展は世界各地の金融市場を繋ぎ、マネーは時間にも国境にも影響されずに大きく流動することになった。欧州、米国、日本、中国やインド、ブラジルなどの新興諸国。利益を求めてこれらの市場を徘徊するマネーの動きはもはや予測不可能な状況に達しつつある。それに拍車をかけるのがバーチャルマネーである。

デリバティブと呼ばれる金融派生商品は予測不可能な状況に達したマネーの動き自体に連動して投機するというもので、これはもはやギャンブル以外の何者でもない。こうした金融派生商品は金融市場間の流動だけで既に想定できない水準に達した不確実性をさらに数百倍に増幅している。サブプライム危機やリーマンショックの本質は予測不可能性であり、これが世界中に不安を供給している。

日本国内を見ると本来的に米国発のサブプライム危機の影響は軽微なはずの東京市場が大きく下落している。これは全体の風潮や流れに敏感な日本人の性向とも無関係ではないが、外需頼みの輸出企業が支える日本経済は世界経済の変調によって大きな影響を受けるということの証左でもある。企業業績が良好とは言えない上に、国と地方を合わせた公的債務は900兆円を越え、IMFは日本国債の格付けを下方修正した。歴史的な政権交代劇の後、新政権はまだ明確な成長ビジョンを打ち出せてはおらず、過去最大の予算を計上。日本人の将来への不安（リスクプレミアム）はかつてないほどに増大した。いま私たちが生きるのはまさに「不安の時代」なのである。

大きな不安を抱えて生きる日本人。そこにはどのような心象が広がっているのだろうか。現実への対応に追われ、その心は潤いを忘れていないか。殺伐としてはいないか、2005年の「倫理意識調査」結果は日本人の倫理観のうち「祖先や神仏を大切にすること」が最も

毀損されていることを示していた。「不安の時代」に安らぎを提供し得るものは多くはない。その最大のものは太古から連綿と連なる命の歴史であり、より具体的に言えば、それは祖先や家族の存在であろう。いま、私たちは何らかの精神的な支柱を求めている。しかし私たちのこの社会は「現世を越えた存在」を畏怖することができるような現世であるのだろうか。

都市化のモーメント

西暦 2010 年。いまや日本人の多くは都市圏に住んでいる。都市化とは「都市部」に向かって「農村部」から人口が移動する状況を指す。いまの日本の状況は都市化が進んだ状況と言ってよいだろう。この「都市化」は私たちの社会にどのような影響をもたらしているだろうか。考えられるのは「世代」や「仕事（家業）」また「家」などにおける様々な「分断」であろう。なかでも祖先からの繋がりが物理的な距離によって「分断」され希薄化することは大きな問題と言える。また、工業やサービス業に立脚する「都市化」は「効率化」或いは「スピード化」という特徴を併せ持つ。「効率」とは現世においてのみ重要な概念であることから考えると「都市」では必然的に「生者」のみを重要視することになる。かくして「都市」における「死」や「死者」の存在は薄れて行くことが容易に予想できる。

また私たちが生きるこの現代社会はきわめて忙しいものである。朝起きて夜眠るまで、私たちには「やるべきこと」が山積している。平日は仕事に追われ、休日も余暇や、どう過ごすかが「課題」として前景化している。多くの者が多くの「やるべきこと」をこなすために、現代社会はますます「スピード化」「効率化」を進めていく。その先にあるものは一体何だろうか。それは「やるべきこと」を「効率的に処理」するだけの社会である。「効率的な処理」だけを追い求めると「やるべきこと」をこなすために「やるべきこと」があり、それをこなすためにまた「やるべきこと」がある、というように「やるべきこと」が増殖していく。その結果、現代に生きる日本人は「こうすればこうなる」という「因果律」に支配された極めて機械的な世界観に辿り着いているのではないだろうか。

都市化がもたらしたのは「分断」と「機械化」である。解剖学者の養老孟司は一貫してこの「都市化」を批判してきた。過去から「分断」された「個」が「機械的な」環境に如何に適応するかが最優先の課題であるとすれば、現代はまさに「意識」だけが増大し本来自明の存在のはずの「身体性」が軽視される傾向にあるだろう。身体の終焉である「死」とそれを迎えた「死者」は都市に存在し得るのだろうか。

都市に死者は生きているか

現代の日本社会は、生者が生きることに汲々とし、より孤立を深めていく構造にある。都市における人間関係はより一層剝削的かつ表層的なものとなり、濃密なコミュニケーションは失われていく。本来、西洋社会における近代的自我の概念とはやや異なる自他意識を持つ日本人であるが、特に若年層などでは、インターネットや携帯電話を介した単なる

「連絡」によって維持される関係性によってのみ自己が確認されるという危うい状況が生まれつつある。一方で近年映画『おくりびと』や楽曲『千の風になって』などが広範に受け入れられるなど「死」や「死者」との関係性を再考する傾向が見られることもまた事実である。「生者」と「生者」の間ですら困難になりつつある濃密な関係性の構築が、「生者」と「死者」との間でどの程度可能なのであろうか。また今、「生者」は「死者」とどのような関係を欲しており、またどのような関係を取り結んでいるのだろうか。今回の大規模調査プロジェクトでは、現代社会における「生者と死者との関わり方」の実態を調査し、そこから現代日本人の「死生観」「自然観」などについての考察を試みる。